

在原業平研究

第三回卒業

芳永 すみ子

(旧姓 豊田)

孤独であった。その孤独は完成を生み、その完成は一瞬のうちに空白、けだるさへと変る。十二月十六日、受付番号三十九番、呆然の数日が続いた。でも、そのうちに何かしらじつくりとした感慨が湧き起って来るのをどうしようもなかった。柳川の地、人そして自分が脳裏に鮮かに映し出され、ひとりで微笑んだものだった。

何処へ来てしまったのだろうか、不安と期待からはいつしか遠ざかり無心に送る日々。

息子の笑顔、夫の安らぎ、それが私の営みである。今、詩集『思ひ出』を手にしてみると白秋の郷愁は憧れの多き幼い日々、娘時代へと私を誘う。幾多の道があったであろう。不可能に近いことを本気で考え続けたこともあった。現実とは掛離れた娘時代がいつ迄も続くような気もしていた。

卒業という区切りの為に福岡へ、白秋のことも、もっと突っ込んでみよう、中途半端にしか為し得なかったあれやこれもと、或る意味では楽しい気持ちの一時帰省であった。

それが僅かのうちに結婚という抜き差しならない破目になる。

確かに自分の選択ではあったが、思いもしない地道な生活でもこの積み重ねが、何はともあれ現在を築いた。不満のありようもない。

しかし時折り微な揺ぎが訪れて来るのは何故であろうか。それは単に、為し得なかったあれこれに対するだけのものでも、不満のありよう等もない現在に対するだけのものでもあるまい。将来を含め、良きも悪しきも一切を含めたものに対する揺ぎ、その何故かというよりむしろ、訪れて来ることに私は感謝しよう。常に、得るものがあれば失うものがある。そういう裏腹の撰択が実はオールオアナッシングという筈ではないのに厳然と進行しているのだから。

卒業論のテーマをほぼ決定づけたのは、これはあまりにしごく単純なことであった。

三年生であった当時の「古今和歌集ゼミ」は別名旅行ゼミと呼ばれるほどであった。飛騨高山、金沢、信濃路をめぐりながら伊藤先生の御指導の下に六人の学生が和歌をよむ心を知るために和歌を作り自ら六歌仙と呼び名づけたことに始まるもので、六歌仙のひとり、在原業平を選んだだけのことである。ところが、これがまさか自分の美的価値体系を再構成することになるうなど、当時は知るよしもなかったのだが……。

業平における資料文献は数多く、まさしく何から手をつけてよいのやら、三年の夏休みは古本屋あさりのみに没頭した感がある。とにかく業平の歌の性格を知るうえにも、索引を出るだけ早く作ることに必要であったため、アイウエオ五十一音の箱を——いやこれは伊藤先生におかりしたものであった——、くる日もくる日も一枚一枚歌をひろってわけて行く煩瑣な仕事が始まった。これがもっとも確実に信頼性に富む方法であることを、自分に言いかけながら。

業平集の伝本はすべて他撰によるもので、類従本系、尊経閣本、歌仙家集本系、異本雅平本の四類にわけられ、これらの比較検討だけでも充分研究内容にたるものではあったが、業平集を読みすすめる

て行くうちに、彼の美意識の中に、私のやるべきテーマを見いだしたのである。

業平集における美意識との出会いはブルトンとナジャの磁極的出会いそのもののように、私に困惑めいた心地よさを味あわせた。業平集にみたそれは、私個人における貧弱な美的体験の中にも確実に一歩ずつ位置づけられていったのだ。その美意識とは、はずされた場での多くの体験から生じたもつとも人間的感性の出会いである。

一つに概念を否定し破壊する空間的作用で、とまどいの中に、もろく美しく輝く生命をもつものである——すなわちここでの概念の否定とはデュシヤンのレディメイド的イメージというより世俗を超越したという方に近い。又、破壊とはダダ的イメージではなく、とまどいの中から生じるシャープなものと言うべきだろうか——世俗を超越した美的世界に純粹なものを求めつつ生きて生きようとした業平はすべてを愛にみた。それは永遠なる美的なる存在である。しかも自らの滅びの美学でもある。わずかな生なまにとらえ、自ら同化せんとする者らしい。滅び行かんとする美を一瞬にとらえ、自ら同化せんとする者にとつての対象は永遠なるものである。その頃の私は、それと同じものを谷崎の「春琴抄」三島の「金閣寺」の中にみた。二つの作品と業平集を比較し結びつけ一人よがりな卒論を書き進めていた折から三島の死が報じられた。三島の思想とは無関係に、すくなくならず動揺していた。それはまさしく金閣寺が炎上し、くずれ落ちたのだっ

過ぎ去りし時をはろけく思うなり業平集をくくりにし日々

△芭蕉の俳論▽

——不易流行について——

第三回卒業 柳井 民子

卒論を書いてから、早くも二年が経ようとしている。提出間際のせっぱつまった苦しきも忘れかけ、あの当時のあがきにも似た状態が懐しく思いだされる昨今である。

私は、卒論に芭蕉を選んだ。理由は、生涯を旅に過ごすといった常人では真似の出来ない芭蕉の存在が、日本文学史の中で最も自分から遠い存在に思われたからである。私にとって芭蕉は、モノクロームの世界であり、色彩の感じられる世界ではなかった。もし、ここで芭蕉との、つながりをもたなかったらおそらく一生読まないで終ってしまうかもしれないと思った。私にとって最も遠い存在を最も近い存在にしたい、こんな気持を契機に題目を「芭蕉の俳論——不易流行について」と決め、準備にとりかかった。まず最初に、芭蕉研究のベースとして、小宮豊隆の『芭蕉の研究』を読むように、このことで読み始めたが、著者の芭蕉に対するのめり込むような傾倒ぶりと、著者の人格を彷彿と感じさせる文章に圧倒されて、読み終えた後、強度の虚脱感を味わった。しかし論文の提出日も決められているので、いつまでもその中に浸っているわけにはいかない。そこで何をもちて芭蕉とかわかりあおうかと考えたが結局、上記の題目に決めた。不易流行とは、芭蕉俳諧の根本理念であり、これを理解することなしに芭蕉芸術の本質に迫ることは出来ないと思えたからである。芭蕉は、古人の求めたるところのものを不易と名づ